

霰ふる

泉鏡花

青空文庫

若いのと、少し年の上なると……

この二人ふたりの婦人おんなは、民也たみやのためには宿世すぐせからの縁えんと見える。ふとした時、思いも懸けない処へ、夢のように姿を露あらわす——

ここで、夢のように、と云うものの、実際はそれが夢だった事もないではない。けれども、夢の方は、また……と思うだけで、取り留めもなく、すぐに陽炎かげろうの乱るる如く、記憶の裡うちから乱れて行く。

しかし目まのあたり前あたり、歴然ありありとその二人を見たのは、何時いつになつて

も忘れぬ。峰を視^{なが}めて、山の端^はに彳^たんだ時もあり、岸^{から}づたいに川船に乗つて船頭もなしに流れて行くのを見たり、揃つて、すつと抜けて、二人が床の間の柱から出て来た事もある。

民也^{この}は九ツ^{とお}……十歳^{とお}ばかりの時に、はじめて知つて、三十を越すまでに、四^{よた}度^びか五^{いつた}度^びは確^たに逢^{しか}つた。

これだと、随分中絶^{なかだ}えして、久しいようではあるけれども、自分には、さまでたまさかのようにには思えぬ。人は我が身体^{からだ}の一部を、何年にも見ないで済ます場合が多いから……姿見に向わなければ、顔にも逢わないと同一^{おなじ}かも知れぬ。

で、見なくつても、逢わないでも、忘れもせねば思^{おも}出^{いだ}すまでもなく、何時^{いつ}も身に着いていると同様に、二個^{ふたつ}、二人の姿もまた、

十年見なかりうが、逢わなかりうが、そんなあいだに間を隔てたとは考えない。

が、つい近くは、近く、一昔前は矢張り前、道理に於て年を隔てない筈はないから、十とおから三十までとしても、その間あいだは言わずとも二十年経つのに、最初逢つた時から幾いくとせ歳を経ても、婦人おんな二人は何時も違わぬ、顔かおかたち容ように年を取らず、些ちつとも変らず、同一おなじである。

水になり、空になり、面影は宿つても、虹のように、すつと映つて、忽ち消えて行く姿であるから、確しかと取留とりとめた事はないが——何時でも二人連づれの——その一人は、年とし紀の頃、どんな場合にも二十四五の上へは出ない……一人は十八九で、この少わかい方は、ふ

つくりして、引ひき緊しまった肉づきの可いい、中ちゆう背ぜいで、……年上の

方は、すらりとして、細いほど瘦せている。

その背せいの高いのは、極めて、品の可よい艶つややかな円まる鬚まげであらわれる。

少わかいのは時より々に髪よりが違ちがう、銀杏いちよう返がえしの時もあつた、高島田の

時もあつた、三輪みつわと云うのに結むすつてもいた。

そのかわり、衣服きものは年上の方が、紋もん着つきだつたり、お召めしだつた

り、時にはしどけない伊達卷だてまきの寝着姿ねまきと変かるのに、若わかいのは、屹きつ

と縞しまものに定さだまつて、帯おビをきちんとめ《し》めている。

二人とも色が白しろい。

が、少すい方は、ほんのりして、もう一人のは沈しんんで見える。

その人柄とりにり、風采とりなり、姉妹ともつかず、主従しゆじゆうでもなし、親おやしい中

の友達とも見えぬ、従姉妹でもないらしい。

と思うばかりで、何故なぜと云う次第は民也にも説明は出来ぬと云う。——何なにしろ、遁のがれられない間あいだと見えた。孰方どっちか乳母の児こで、乳姉妹ちきょうだい。それとも嫂あによめと弟おとよめ嫁か、敵同士かたきか、いずれ二重ふたえの幻影である。

時に、民也が、はじめてその姿を見たのは、揃そろつて二階からすらすらと降りる所。

で、彼が九ツか十の年、その日は、小学校の友達と二人で見た。
霰あられの降ふつた夜更よふけの事——

山国の山を、町へ掛けて、戸外の夜の色は、部屋の裡からよく知れる。雲は暗かろう……水はもの凄く白かろう……空の所々に颯と葉研のようなひびが入って、霰はその中から、銀河の珠を砕くが如く迸る。

ハタと止めば、その空の破れた処へ、むらむらとまた一重冷い雲が累りかかって、薄墨色に縫合させる、と風さえ、そよとのもの音も、蜜蝋を以て固く封じた如く、乾坤寂となる。……

建着の悪い戸、障子、雨戸も、カタリとも響かず。鼯が覘くような、鼠が匍匐つたような、切つて填めた菱の実が、ト、ベツかつこをして、ペろりと黒い舌を吐くような、いや、念の入った、

雑多な隙間、破れ穴が、寒さにきりきりと歯を噛んで、呼吸を詰めて、うむと堪えて凍着くが、古家の煤にむせると、時々遣切れなくなつて、潜めた嚏、ハツと噴出しそつで不気味な真夜中。板戸一つが直ぐ町の、店の八畳、古畳の真中に机を置いて対向いに、洋燈に額を突合わせた、友達と二人で、その国の地誌略と云う、学校の教科書を読んでいた。——その頃、風をなして行われた試験間際に徹夜の勉強、終夜と称えて、気の合つた同志が夜あかしの演習をする、なまけものの節季仕事と云うのである。

一枚……二枚、と両方で、ペエジを遣つ、取つして、眠気ざましに声を出して読んでいたが、こう夜が更けて、可恐しく陰気に

閉とぎされると、低い声さえ、びりびりと氷を削るように唇へきしんで響いた。

常つねさんと云うお友達が、読み掛けたのを、フツと留とめて、

「民さん。」

と呼ぶ、……本を読んだとは、からりと調子が変わって、引ひきいれられそうに滅めい入いって聞えた。

「……何な、
ななに
何、」

ト、一つ一つ、自分の睫まつげが、紙の上へばらばらと溢こぼれた、本の、片仮名まじりに落葉おちばする、山だの、谷だのをそのままの字を、熟じつと相手に読ませて、傍目わきめも触らず視みていたのが。

呼ばれて目を上げると、笠は破やぶれて、紙を被かぶせた、黄色に燻くすぶつ

たほやの上へ、眉の優しい額を見せた、頬のあたりが、ぽつと白く、おぼろよ朧夜に落ちた目めかざらと云う顔かおつき色。

「寂さびしいねえ。」

「ああ……」

「何時だねえ。」

「先刻さつき二時うったよ。眠くなつたの？」

対手あいては忽ちたちま元気づいた声を出して、

「何、眠いもんか……だけでもねえ、今時分になると寂しいねえ。」

「其処に皆寝ているもの……」

と云つた——大きな戸棚、と云つても先祖代々、刻み着けて何い

時が代にも動かした事のない、……その横の襖一重の納戸の内に
は、民也の父と祖母とが寝ていた。

母は世を早うしたのである……

「常さんの許よりか寂しくはない。」

「どうして？」

「だって、君の内はお邸だから、広い座敷を二つも三つも通らな
いと、母さんや何か寝ている部屋へ行けないんだもの。この間、
君の許で、徹夜をした時は、僕は、そりや、寂しかった……」

「でもね、僕ン許は二階がないから……」

「二階が寂しい？」

と民也は真黒な天井を。……

常さんの目も、齊ひとしく仰いで、冷く光った。

三

「寂しいって、別に何でもないじゃないの。」

と云ったものの、両方で、机をずつて、ごそごそと火鉢かじりに嚙かじり着ついて、ひつたりと寄より合あわす。

炭は黒いが、今しがた継ついだばかりで、尉じょうにもならず、火氣かきの立ちぎわ。それよりも、徹夜の温おさ習らいに、何よりか書か入きれな夜半やはんの茶漬ちぢで忘れられぬ、大福あんめいた餡餅もを烘あぶつたなごりの、餅網もちあみが、佗わびしく破や蓮ればすの形で畳たたみに飛んだ。……御馳走ごちそうは十二時と云うと早は

や済んで、——一つは二人ともそれがために勇気がないので。：

：

常さんは耳の白い頬を傾けて、民也の顔を覗く^{のぞ}ようにしながら、

「でも、誰も居ないんだもの……君の許^{とこ}の二階は、広いのに、がらんとしている。……」

「病気の時はね、お母^{つか}さんが寝ていたんだよ。」

コツコツ、炭を火箸で突^ついて見たつけ、はつと止^やめて、目を一瞬^{またた}いて、

「え、そして、亡くなった時、矢張^{やっぱり}、二階。」

「ううん……違う。」

とかぶりを掉^ふって、

「其処のね、奥……」

「小父さんだの、寝ている許かい。……じゃ可いや。」と莞爾にっこりした。

「弱虫だなあ……」

「でも、小母さんは病氣の時寝ていたかつて、今は誰も居ないんじゃないか。」

と觀かん世ぜ振よりが挫ひげしたや体ていに、元氣なく話は戻る……

「常さんの許だつて、あの、広い座敷が、風はすうすう通つて、それで人っ子は居ませんよ。」

「それでも階し下たばかりだもの。——二階は天井の上だろう、空に近いんだからね、高い所には何が居るか知れません。……」

「階下だつて……君の内でも、この間、僕が、あの空間を通つた時、吃驚したものがあつたじゃないか。」

「どんなものさ、」

「床の間に鎧が飾つてあつて、便所へ行く時に晁々光つた……わツて、そう云つたのを覚えていないかい。」

「臆病だね、……鎧は君、可恐いものが出たつて、あれを着て向つて行けるんだぜ、向つて、」

と氣勢つて肩を突構え。

「こんな、寂しい時の、可恐いものにはね、鎧なんか着たつて叶わないや……向つて行きや、消つ了うんだもの……これから冬の中頃になると、軒の下へ近く来るつてさ、あの雪女郎見たいな

もんだから、」

「そうかなあ、……雪女郎つて真個ほんとにあるんだつてね。」

「勿論だつき。」

「雨のびしよびしよ降る時には、油舐坊主あぶらなめぼうずだの、とうふ買小僧かいこぞうだのつて……あるだろう。」

「ある……」

「可厭いやだなあ。こんな、霰あられの降る晩には何にも別べつにないだろうか。」

「町の中には何にもないとき。それでも、人の行かない山寺だの、峰の堂だの、額かみの絵がね、霰がぱらぱらと降る時、ぱちくり瞬まばたきをするんだつて……」

「嘘を吐く……」

とそれでも常さんは瞬きした。からりと廂ひさしを鳴らしたのは、樋とだけすべすべ、おち落ちたまりの霰らしい。

「うそなもんか、それは真暗な時……ちようど今夜見たような時なんだね。それから……雲の底にお月様が真まつさお蒼さおに出ていて、そして、降る事があるだろう……そう云う時は、八田はつたがた潟がたの鮒ふなが皆首を出して打たれるって云うんです。」

「痛かろうなあ。」

「其処が化けるんだから、……皆、兜を着ているそうだよ。」

「じゃ、僕とこン許とこの蓮池の緋鯉なんかどうするだろうね？」

其処には小船も浮べられる。が、穴のような真暗な場末の裏町

を抜けて、大川に架けた、近道の、ぐらぐらと揺れる一錢橋と
 云うのを渡つて、土塀ばかりで家の疎な、畠も池も所々、侍
 むらいまちいくまが町を幾曲り、で、突当りの松の樹の中のその邸に行く、
 ……常さんの家うちを思うにも、恰あたかもこの時、二更にこうの鐘の音おと、幽かすか

四

町なかの此処も同じ、一軒家の思おもいがある。

民也は心もその池へ、目も遥々はるばるとなつて恍惚うっとりしながら、

「蒼い鎧を着るだろうと思う。」

「真赤な鱭ひれへ。凄ひれい月で、紫色に透すきとお通ろうね。」

「其処へ玉のような霰あられが飛ぶんだ……」

「そして、八田潟の鮒いぐさと戦いくさをしたら、何方どっちが勝つ？……」

「そうだね、」

と真顔まけんこに引込まれて、

「緋鯉は立派だから大将だろうが、鮒づは雑ぞうひよう兵ひようでも数が多いよ

……：：：：潟かた一杯いっぱいなんだもの。」

「蛙かわずは何方どっちの味方をする。」

「君の池の？」

「ああ、」

「そりや同じ所に住んでるから、緋鯉に属つくが当あたり前まえだけれどもね、君が、よくお飯まんまつぶ粒つぶで、糸いとで釣つりあ上げちや投なげるだろう。」

ブツと咽喉のどを膨らまして、ぐるりと目を円くして腹を立つもの：
鮎の味方になろうも知れない。」

「あ、また降るよ……」

凄まじい霰の音、八方から乱打みだれうつや、大屋根の石もからからと転げそううずまで、雲の渦うずまく影が入って、洋燈ランペの笠が暗くなった。

「按摩あんまの笛が聞えなくなつてから、三度目だねえ。」

「矢が飛ぶ。」

「弾たまが走るんだね。」

「緋鯉と鮎とが戦うんだよ。」

「紫の池と、黒い瀉しとみで……」

「葩ちよつとを一しとみ寸開けてみようか、」

と魅せられた体ていで、ト立とうとした。

民也は急に慌しく、

「お止よし?……」

「でも、何だか暗い中で、ひらひら真黒なのに交つて、緋だか、紫だか、飛んでいそううで、面白いもの、」

「面白くはないよ……可恐こわいよ。」

「何故?」

「だつて、緋だの、紫だの、暗い中うちに、霰あられに交つて——それだと電いなびかりがしているようだもの……その蔀しとみをこんな時に開けると、そりや可恐こわいぜ。」

さあ……これから海が荒れるぞ、と云う前触れひさしに、廂ひさしよりか背

のおおき高い、大な海坊主が、海から出て来て、町の中をある歩行いいていてね……人がのぞ覗くと、蛇のように腰を曲げて、その窓からにらみかえ睨かえ返して、よくも見たな、よくも見たな、と云うそうだから。」

「嘘だ！ 嘘ばっかり。」

「ほん真個だよ、あられ霰あだつて、半分は、その海坊主がけあ蹴あ上げて来る、波のしぶき※が交つてるんだとさ。」

「へえ？」

と常さんは未だま腑まに落ちないか、立たち掛かけた膝おとを落おさとなかつた……

霰は屋根をかけまわ駈まわ廻わる。

民也は心に恐怖のある時、その蓐を開けさしたくなかつた。

母がまだ存ぞんじょう生の時だった。……一夏あるなつ、日の暮方から凄じ

い雷雨があつた……電いなびかり光絶間なく、雨は車軸を流して、荒あらが

金の地つちの車は、轟とどろきながら奈落の底に沈むと思う。——雨宿り

に駈かけこ込んだ知合の男が一人と、内うちじゆう中、この店に居すくまつた。

十時を過ぎた頃、一呼吸吐かせて、もの音は静まつたが、裾を捲

いて、雷はたた神がみを乗せながら、赤あかくろ黒に黄を交えた雲が虚空へ、

舞い舞い上あがつて、昇る氣勢けはいに、雨が、さあと小止おやみになる。

その喜びを告もうさんため、神棚に燈みあかし火を点じようとして立つた

父が、そのまま色をかえて立たち窘すくんだ。

ひい、と泣いて雲に透とおる、……あわれに、悲しげな、何とも異

様な声が、人々の耳をも胸をも突つきつらぬ貫ぬいて響いたのである。

五

笛を吹く……と皆思った。笛もある限り悲哀を籠めて、呼吸の
続くだけ長く、かつ細く叫ぶらしい。

雷鳴に、殆ど聾いなんとした人々の耳に、驚破や、天地一つの
声。

誰もその声の長さだけ、気を閉じて呼吸を詰めたが、引く呼吸
はその声の一度止むまでは続かなかつた。

皆戦いた。

ヒイと尾を微かに、その声が切れた、と思うと、雨がひたりと

止んで、また二度めの声が聞えた。

「鳥か。」

「いい^や否。」

「何だろこの。」

祖母と、父と、その客と^{ことば}言を交わしたが、その言葉も、^{きらきら}晃々と、震えて動いて、目を遮る^{いなびかり}電光は隙間を射た。

「近い。」

「^じ直き其処だ。」

と云う。叫ぶ声は、確かに筋向いの二階家の、軒下のあたりと
覚えた。

それが^{みこえ}三声めになると、泣くような、怨むような、^{うめ}呻吟くよう

な、くるしもが苦み躓くかと思ふ意味が明かにあきら籠こもつて来て、あた新らしくまた耳つんざを劈く……

「見よう、」

わか年少くてくつきよう屈 竟なその客は、身震いして、すつくと立つて、

うちじゆう内 中で止めるのも肯きかないで、タン、ド、ドン！ とその、

其処しとみの蔀を開けた。——

「何、」

と此処まで話した時、常さんは堅くなつて火鉢を掴んだ。

「その時の事を思おも出いだすもの、外ほかに何が居いようも知れない時、そ

の蔀を開けるのは。」

と民也は言う。

却説、大雷の後の稀有なる悲鳴を聞いた夜、客が葦を開けようとした時の人々の顔は……年月を長く経ても眼前見るよ
うな、いずれも石を以て刻みなした如きものであつた。

葦を上げると、格子戸を上へ切つた……それも鳴るか、簫の笛の如き形した窓のような隙間があつて、衝と電光に照される。

と思うと、引緊めるような、柔かな母の両の手が強く民也の背に掛つた。既に膝に乗つて、嘔り着いていた小児は、それなり、薄青い襟を分けて、真白な胸の中へ、頬も口も揉込むと、恍惚となつて、もう一度、ひよいと母親の腹の内へ安置され終んぬで、

トもんどりを打つて手足を一つに縮めた処は、滝を分けて、すとんと別の国へ出た趣おもむきがある、……そして、透すきとお通る胸の、暖かな、鮮からくれない血ちの美しさ。真紅の花の咲満さきみちた、雲の白い花園に、朗ほがらかな月の映るよ、とその浴衣の色を見たのであった。

が、その時までの可おそろ恐しさ。——

「常さん、今君が葦を開けて、何かが見えたって、僕は潜もぐりこ込む懐ふところ中がないんだもの……」

簾しようの窓から覗いた客は、何も見えなかった、と云いながら、真ま蒼つさおになつていた。

その夜から、筋向うのその土蔵つぎ附の二階家に、一人気が違つた
婦おんながあつたのである。

ひっそり あられ
寂寞と霰が止む。

民也は、ふと我に返つたようになって、

「去年、おつか母さんがなくなつたからね……」

ひおけ おもてそむ
火桶の面を背けると、机に降ふりこ込んだ霞があつた。

じゆうと火の中にも溶けた音。

「勉強しようね、僕は父おとつさんがないんだよ。さあ、」

鮎あしが兜を着ると云う。……

「八田瀉の処を読もう。」

と常さんは机の向うに居直つた。

洋燈ランペンが、じいじいと鳴る。

その時であつた。

六

二階の階子壇はしごだんの一番上いつちうえの一壇目……と思ふ処へ、欄間らんまの柱を真黒に、くつきりと空そらにして、袖を欄干てすり摺ずれに……その時は、濃いお納戸と、薄い茶と、左右に両方、褌つまさき前を揃えて裾を踏みくぐむようにして、円鬚まげと島田の対丈ついたけに、面影白く、ふツと立つた、両個ふたりの見も知らぬ婦人おんながある。

トその色も……薄いながら、判然はつきりと煤すすの中に、塵を払つてく

つきりと鮮麗あざやかな姿が、二人が机に向つた横手、畳たたみ数二畳ばかり隔へだてた処に、寒き夜なれば、ぴつたり閉めた襖一枚……台所へ続くだだつ広い板敷との隔へだてになる……出入口ではいりぐちの扉ひらきがあつて、むしやむしやと巖いわの根に蘭を描いたが、年数算さんするに堪たえず、で深山みやまの色に燻くすぼつた、引手ひきての傍わきに、嬰兒あかんぼの掌てのひらの形して、ふちのめくれた穴が開いた——その穴から、件の板敷を、向うの反古張ほごばりの古壁へ突つき当あたつて、ぎりりと曲つて、直角に菟藟こんにやくいろ色の干乾ひからびた階子壇……十とおばかり、遥かに穴の如くに高いその真上。

即ち襖の破目やれめを透とおして、一つ突当つて、折屈おりまがつた上に、たとえば月の影に、一ひとは刷彩はいろどつた如く見えたのである。

トンと云う。

と思うと、トントントンと軽い柔かな音に連れて、棲つまが揺れ揺れ、揃もすそった裳もすそが、柳の二ふた枝えだ靡なびくよう……すらすらと段を下りた。

肩を揃もすそえて、雛の絵に見る……袖を左右から重ねた中に、どちらの手だろう、手燭か、台か、裸はだか火かびの蠟燭を捧たげていた。

蠟の火は白く燃えた。

胸のあたりに蒼味が射す。

頬ほのかかり白しろ々と、中にも、円まる鬚まげに結ゆつたその細ほ面おものてけだか
 気け高く品の可い女に性よの、纏もつれた鬢びんの露つばかり、面おも妻やつれした
 横よこ顔を、瞬またきもたしない双その瞳うに宿すした途端とに、スーと下りて、板
 の間で、もの優しく肩が動くと、その蠟の火が、件の絵襖の穴を
 覗のぞく……その火が、洋燈ランプの心しんの中へ、※と入いって、一つになつた

ようだった。

やあ！ 開けると思う。

「きやツ、」

と叫んで、友達が、前へ、さき背後の納戸へうしろ匆はねこ込んだ。

口も利けず……民也もその身体からだへ重なり合つて、父の寝たまくら枕もとへ突伏つつぶした。

ここの障子は、幼いものの夜更よふかしを守つて、寒いに一枚開けたまま、霰あられの中にも、父と祖母の情なさけの夢は、紙一重ひとえの遮るさえなく、机のあたりに通かよつたのであつた。

父は夢だ、と云つて笑つた、……祖母もともに起きて出いで、火鉢の上には、再び芳かんばしい香かおりが満つる、餅網がかかつたのである。

茶の煮えた時、真夜中にまた霰が来た。

後で、常さんと語かたりあ合あうと……二人の見たのは、しかもそれが、

錦絵を板はんに合わせたように同一おなじかつたのである。

これが、民也の、ともすれば、フト出逢う、二人の姿の最初はじめであつた。

常さんの、三日ばかり学校を休んだのはさる事ながら、民也は、それが夢でなくとも、さまで可おそろし恐おそろしいとも可あやし怪あやしいとも思わぬ。

敢あえて思わぬ、と云うではないが、こうしたあやしみには、その時分馴なれていた。

毎夜の如く、内井戸の釣瓶つるべの、人手を借らず鳴つたのも聞く：

：

輓轡ろくろが軋きしんで、ギイと云うと、キリキリと二つばかり井戸繩の
 擦すれ合う音あして、少須しばらくして、トンと幽かすかに水に響く。
 極きまつたように、そのあとを、ちよきちよきと細こまかに俎まないたを刻む音。
 時雨しぐれの頃から尚なお冴さえて、ひとり寝の燈火ともしびを消した枕かよに通う。

七

続いて、台所を、ことごとと云う躑あしおと音がして、板の間へ掛かかる。
 ——この板の間へ、その時の二人の姿は来たのであるが——また
 ……実際より、寝ねていて思う板の間の広い事。
 民たみ也は心に、これを板の間ヶ原とだ、と称とえた。

伝え言う……孫右衛門と名づけた気の可い小父さんが、どくしや独酌よいざめの酔醒よめに、我がねたを首あげて見る寒さかな、と来山張らいざんはり

の屏風越しに、魂消たまげた首を出して覘のぞいたと聞く。

台所の豪傑ごうけつばら儕ざしきがた、座敷方の僭せんじよう上えようえいがいきどおり、栄耀栄華に憤おとを発し、

しや討しやくて、緋縮緬ひぢりめん小褌こづまの前まへを奪取ばいとれとて、竈將軍かまどが押取おつとつた柄ひ

杓しやくの采配、火吹竹の貝かいを吹ふいて、鍋釜なべの鎧武者よろいが、のんのんの

んのんと押出おしだしたとある……板の間いヶ原はらや、古戦場ふるせんば。

襖一重いっしゆうちは一騎打いっきうちで、座敷方ざしきがたでは切所せつしよを防まいだ、其処そのところの一段

低いのも面白い。

トその気で、頬杖ほつぢをつく民也たみに取とつては、寢床ねどから見るその板

の間は、遥々はるばるとしたものであつた。

登あしおと音は其処を通つて、一寸ちよつと止んで、やがて、トントンと壇あがを上る、と高い空で、すらりと響く襖の開く音。

「ああ、二階のお婆さんだ。」

と、熟じっと耳を澄ますと、少しばらく時して、

「ええん。」

と云せきばらいう咳せきばらい。

「今度は二階のお爺さん。」

この二人は、母の父母で、同ひとついえ家に二階住居ずまいで、睦むつまじく暮し

だが、民世のもの心を覚えて後、母に先だつて、前後して亡くな
られた……

その人たちを、ここにあるもののように、あらぬ登音を考えて、

咳しわぶきを聞く耳には、ひとけはい人氣勢のない二階から、手燭して、するする

と壇を下りた二人の姿を、さまで可おそろし恐いとは思わなかった。

却かえつて、日を経ふるに従つて、物語を聞きさした如く、床ゆかしく、

可なつか懐しく、身に染みるようになったのである。……

霰あられが降れば思おもいが凝こる。……

そうした折よ、もう時雨の頃から、その一二年は約束のように、

井戸の響、板の間の登音、人なき二階の襖の開くのを聞き馴なれたが、

婦おんなの姿は、当時また多しばらく日あいだの間見えなかつた。

白菊の咲く頃、大屋根へ出て、棟むねがわら瓦ををひらりと跨またいで、高

く、高く、雲の白きが、微かすかに動いて、瑠璃るりいろ色に澄渡すみわたった空を仰

ぐ時は、あの、夕立の夜を思おもい出いす……そして、美しく清らかな

母の懐にある幼おきなご児の身にあこがれた。

この屋根と相あいむか向つて、真まっさお蒼ながれな流を隔てた薄紫の山がある。

医いおうぜん王山。

いただき

頂を虚空に連ねて、雪しろがねの白銀の光を放つて、遮る樹立こたちの影も

ないのは、名にし負おう白はくさん山である。

やや低く、山の腰にその流を繞めぐらして、萌黄もえぎまじりの朱の袖を、

梯おもかげの如く宿したのは、つい、まのあたり近い峰、向むかい山と人は

呼ぶ。

その裾を長く曳ひいた蔭に、円い姿見の如く、八田瀉の波、一ひとつ

所ころの水が澄む。

島かと思う白帆に離れて、山の端はの岬の形、にっと出た端はしに、

鶴の背に、緑の被衣かつぎさせた風情の松がある。

遥かに望んでも、その枝の下は、ひとむしろ一筵、はききよ掃清めたか、と塵ちりも留とどめぬ。

ああ山の中に葬った、母のおくつきは彼処かしこに近い。

その松の蔭に、その後のち、時々二人して佇たたずむように、民也は思った、が、母にはそうした女のつれはなかつたのである。

月の冴ゆる夜は、峰に向つた二階の縁えんの四枚よまいの障子に、それが、あらぬか、松影射しぬ……戸袋かけて床の間へ。……

また前に言つた、もの凄く暗い夜も、年経て、なつかしい人を思えば、降ふりつも積あられる霰あられも、白菊。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十四卷」岩波書店

1942（昭和17）年3月10日第1刷発行

初出：「太陽」

1912（大正元）年11月号

※表題は底本では、「霰《あられ》ふる」となっています。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年10月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霰ふる

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>